



日蓮大聖人様は文永八年九月、竜の口法難のあと、佐渡に御流罪になられますが、その間も大事の御法門を顕され、念仏をはじめ多勢の人々を折伏されました。

その時佐渡に住んでいた阿仏房と千日尼の夫妻も、念仏の信者でしたが、大聖人様の折伏で、念仏を捨てて、南無妙法蓮華経と唱え、大聖人様の弟子になりました。

当時は、大聖人様のいらつしやる塚原三昧堂の近くを歩くだけで、牢屋に入れられたり、ましてや、食べ物を運んだりしたことがわかれば、死刑にされるほどでした。そんな中、阿仏房と千日尼は少しもひるまずに大聖人様へ真心の御供養を続けました。

大聖人様が御赦免となり鎌倉に帰られて、やがて身延に入られてからも、九十歳という高齢もかえりみず、阿仏房は三度も、大聖人様にお会いするのために身延を訪ねました。そのかげでは、奥さんである千日尼の純真な信心があつたことはいうまでもありません。

この佐渡から身延まで、阿仏房が大聖人様を求めて困難な中を必死に行かれた姿を、今私達は御登山として受け継ぎ、常に阿仏房と千日尼を鑑として信心に励んでいくことが大切です。では、始めます。



阿仏房は佐渡が島に流された順徳上皇じゆんとくじよごうに仕つかえていたさむらいでしたが、上皇が亡くなつてから大聖人様とお会いするまでの二十八年間、亡き上皇を弔とむらひうために、妻の千日尼と毎日念仏ねんぶつを唱えていました。

そのころ、阿仏房は、悪い僧侶が佐渡に流されてきた、といううわさを耳にしました。

「南無阿彌陀仏と唱える念仏宗は、無間地獄むげんじごくに墜おちて苦しむ邪宗教じやしゆききょうだと言っている、とんでもない悪い坊主ぼうずだ！」

と、大変忿いかった阿仏房は、ある夜のこと、そのお坊さんの命をねらつて、お堂に近づいていきました。

そのお堂にいた方こそ、竜の口の法難のあと、佐渡に御流罪ごりゆうざいになられた日蓮大聖人様でありません。

やつつけてやろうと思つて行つた阿仏房でしたが、逆に念仏の間違つていることを破折はしやくされ、大聖人様の御慈悲あふれた仏様のお姿に、阿仏房は心が変わりました。

そして、念仏を一切捨て払い、大聖人様のお弟子となり、南無妙法蓮華経と唱えるようになりました。



十一月の佐渡が島は針を刺すような寒さで  
すが、阿仏房と千日尼は雪明かりをたよりに、  
おひつを背負って、手を取り合って、大聖人  
様がいらつしやる塚原三昧堂へ、急いでいき  
ました。

阿仏房は幕府が大聖人様を飢え死にしよ  
うとしていることを知って、怒りに燃えて、  
「大聖人様を、なんとしてもおまもりするん  
だ！」

と、心を決めていました。

三昧堂に論難に行ったり、罵倒したり、石  
でも投げられるために近づくことは許されたかも  
しれません。当時島の役人は、大聖人様の  
お堂の前を通ったからと言って牢に入れた  
り、あるいは食べ物を持っていくことがわか  
れば、国から追放したり、妻や子供を取り上  
げるといふ冷酷きわまる弾圧をしました。

しかし、阿仏房夫妻は少しも恐れませんでした。  
そのお姿に対して、

「おひつを背負って毎晩来て下さることは、  
いついつまでも決して忘れません。あなた方  
は私の母親が佐渡に生まれ変わって来たよう  
に思われます」

と、大聖人様は心からの感謝のお気持ちをお  
示しになっております。



阿仏房の信心をいつそう強くしたのは、塚つか原はら問答もんどうでした。

塚原問答というのは、文永九年一月十六日、大聖人様のお住まいでありました、塚原三昧堂の前で行われた、有名ゆうめいな法論ほうろんです。

佐渡はもちろん、東北地方のあちこちから、様々な宗教の、五・六百ごろっぴやくにん人も僧侶そうりよが集まりました。

その僧侶そうりよたちは、法論を戦たたかわせるのではなく、只ただ感情かんじょうにまかせて、大聖人様の悪口を言っつてさわぐだけでした。

阿仏房と千日尼をふく含めた、大聖人様から折伏せつぷくされて、それまでの邪宗教を捨すてて、大聖人様をお慕したいしている人々は、「もしものがあれば、命をなげうつても、大聖人様をおまもりしよう！」と、真剣に見守まもっていました。



「あなた方は仏法の話しのためにわざわざこの佐渡の地まで来たのでしよう。悪口など止めなさい」

と、大聖人様は皆を一括しました。

そして、念仏宗・禅宗・真言宗・律宗などの僧侶の過ち、また、教えが末法という時期にあっていないことなどを論しました。

間違った教えを信じていた僧侶たちは、色とりどりの衣を引きずって、すごすごと帰って行きました。

また、両手を地について

「私が間違っていました。大聖人様の教えの正しいことがよく分かりました」と、心から悔い改める人もいました。

阿仏房と千日尼は、大聖人様の素晴らしさに心から喜び合いました。



塚原問答が行われてからは、大聖人様の悪口を言う人はだんだん少なくなっていきました。

しかし、大聖人様に心を寄せる地頭の本間殿が、鎌倉に行ったすきに、問答で破れた念仏宗の者共が、今こそ復讐のチャンスとばかりに、猛烈な迫害を開始しました。

大聖人様は、阿仏房たちの進めもあつて、住まいを一の谷に移されました。

阿仏房夫妻は、場所が変わってもこれまで以上に御供養の真心を尽くされました。

「少しでも大聖人様のお役に立てるのなら」と、千日尼も出来るだけご不自由をおかけすることのないように、紙や筆や墨など、背負つて、大聖人様にお届け致しました。

大聖人様は、凍えるような極寒の厳しい環境の中で、不惜身命の外護の任を尽くす真の法華講衆たる阿仏房夫妻に護られ、大事なお手紙や御法門をたくさん書かれました。

特に、文永九年二月の『開目抄』、文永十年四月の『観心本尊抄』は、人本尊と法本尊開頭の有名な御書になっています。



文永十一年三月、思いもかけず幕府の赦免しゃめん状じょうが佐渡に届とどきました。昔より生きてこの島を去さることがないと言われていた流罪るざいが許ゆるされ、大聖人様も日興上人様も感無量かんむりょうであつたでありましょう。

阿仏房夫妻も、命がけでおまもり申し上げ、ついに御赦免ごしゃめんの喜びの日を迎えることが出来たことを、手を取り合つて喜び合つたことでありました。

しかし、それは同時どうじに、大事な大事なかけがえのない師匠ししやうとの悲しい別れをも意味していました。

「大聖人様、お身体からだを大切に」「ごきげんよう、さようなら」

大聖人様は島を離はなれ、鎌倉へ帰つていきました。その時のお気持ちを「剃そつてしまつて無い髪かみの毛けを後ろに引かれ、すすむ足も後ろに戻もどつてしまふ」と、大聖人様も島を離れる事が忍しのび難がたかつたと仰せになつております。阿仏房夫妻は、あふれる涙を拭ふきもしないで、ただただ合掌がっしょうをして、船が見えなくなるまで、お見送り致しました。

阿仏房と千日尼にとつて、大聖人様にお仕つかえ申し上げた、この三年間ほど生き甲斐がいのある楽しい充実じゆうじつした年月としつきはありませんでした。



大聖人様は鎌倉に戻られて、すぐに幕府を諫曉かんぎようされました。しかし、三度目の国家諫曉こっかかんぎようも幕府は聞き入れないので、身延の山にお入りになりました。

阿仏房夫妻はなんとしても大聖人様への恋慕ぼ渴仰かつごうの心を禁きんじ得えず、この年と、翌健治元年と、弘安元年と合計三回も身延の大聖人様を訪ねたずられています。この阿仏房の精神が現在の御登山の根本精神こんぽんせいしんとなつています。

「えっ？ たった三回か？ と思った人はいませんか？」

今はバス・新幹線しんかんせん・飛行機ひこうきとか様々な交通が発達して、楽に御登山出来ますが、当時は、佐渡から身延まで片道、阿仏房は歩きで二十日間かけて、大聖人様にお会いしに行っていました。それも、三回目は九十歳こうれいという高齢でした。

海を渡りわた、山を登りのぼ、谷を越しこ、文字通り困難こんなんな道のりでありました。その上、自分の食料や、大聖人様への御供養の、のり・わかめ等の品々を携たずさえて、大聖人様のもとを目指したのであります。

なんとしても大御本尊様にお会いしたい、との精神です。



しかし大聖人様が心にかげられたのは、このように夫を送り出し、留守るすを守っている千日尼のことでありました。

千日尼は、阿仏房が無事大聖人様に御目通りさせていただき、元気にかえってこれるよう、毎日御本尊様に祈り、夫の留守をしつかり守っていました。

千日尼への

「たとえその身は遠い佐渡の地にあつたとしても、その心はすでに師匠がいるこの身延に來ていますぞ」

との、大聖人様のお言葉は、阿仏房をはるか遠く旅立たびだたせ、日々無事を祈りながら留守を守ってきた者として、これ以上の感激かんげきは無かつたのではないでしようか。

そしてさらに、

「いよいよ信心に励んで行きなさい。仏の金言にその身を任せなさい。その人が如説修行によせつしゆぎようの人であります」  
との、励はげましのお手紙も頂いております。

千日尼は御供養の品に添そえて、御法門についてのお伺うかがいのお手紙も託たくしてありますので、大聖人様のお手紙を、感謝感激かんしやくかんげきの気持ち一杯いっぱいで拝はいしたことでしょう。



「大聖人様お懐かしゅうございます」

「おおー。これは阿仏房殿ではないか。遠いところをよく来られましたな」

大聖人様にお会いした阿仏房のほおを、熱い涙が、止めどなく流れました。

大聖人様は阿仏房の汚れ無きひたむきな信心をお褒めになり、阿仏房上人とか、阿仏上人とか呼ばれ、大聖人自らが酒を酌んで、阿仏房の遠路の労をねぎらったと伝えられています。

この師弟の姿が、現在の御法主上人猊下様の御目通りの儀式のもとになっていると言われていきます。

そして実に九十歳の時に最後の御登山をいたしました。その時、阿仏房は自分の遺骨を大聖人様がいらつしやるこの身延に収めたいと大聖人様に願ひ出ました。それが今生における師弟の最後の対話でした。



翌弘安二年三月二十一日、九十一歳の高齢で阿仏房はこの世を去りました。

妻千日尼、子供の藤九郎に見まもられながら、阿仏房は大聖人様の面影を偲びつつ、唱題の中に静かに息を引き取っていきました。

阿仏房の信心は、晩年わずか八年でありましたが、阿仏房にとって一生の内、最も充実し歓喜に満ちた時間であったことでしょう。

大聖人様は千日尼に、阿仏房の純真な信心を全うした姿に対し、

「故阿仏房の精霊は、霊鷲山の多宝仏の宝塔の中に、東を向いておられる」と、具体的に成仏の境涯で自受法楽されていることを示されています。

一子藤九郎はこの年の七月二日、故阿仏房の遺骨を、父親の希望通り、大聖人様のおられる身延へ持参し埋葬しました。



阿仏房の死後、妻の千日尼がどのような日々を送り、いつ亡くなったのかは不明ですが、弘安三年七月二日の大聖人様のお手紙には、「きよねん去年は七月二日、父親の遺骨を首にかけ、いっせんり一千里の山や海を越え、遠く身延まで御登山され、遺骨を埋葬された。又今年は、七月一日に身延まで御登山されて、お墓参りの供養をされた。子に過ぎたる宝はない、子に過ぎたる宝はない」

と、子供の藤九郎の信心強盛で、孝養の志が厚いことをお褒めになっほていますので、そのお手紙を頂いただいた千日尼も、さぞかし幸福な晩年を過すごしたことでありましよう。

この信心は、阿仏房と千日尼から、子供の藤九郎へ法統相ほつとうそうぞく続され、藤九郎も親の後を継ついで、佐渡北陸方面の弘教に励はげみました。

子供の信心の源は、みなもとひとえに、阿仏房と千日尼の命をかけての大聖人様への御給仕と御供養の姿、そして、大聖人様を恋慕渴仰れんぼかつごうしての御登山の姿にあります。

私達も、この阿仏房と千日尼の信心を、自分の信心の鑑かがみとして、一生悔くいのない精進しょうじんを続けていきたいと思います。

以上で終わります。